

『ボストン』に見られる「^{ニューウーマン}新しい女性」

中島 祥子

The New Woman in Upton Sinclair's *Boston*

Shoko Nakajima

The aim of this essay is to discuss Cornelia Thornwell, the heroine of Upton Sinclair's *Boston* (1928), in the social context of the day.

The novel begins in 1920, when one of the most significant decades in American history started. The 1920s saw women starting to cut conspicuous figures in various aspects of their lives. These women were strikingly new to the contemporary, "ordinary" generation. They were called "New Women," and tried to defy the traditional sense of values.

The author of this essay interprets Cornelia as an expression of a "New Woman." When her husband passes away, she leaves her home mainly because she is determined to live life on her own terms, even though she is already 60. She happens to become acquainted with Bartolomeo Vanzetti and subsequently discovers how people at the bottom of the social ladder live. The discovery gives her the impetus to think more about her way of life and act of her own free will.

はじめに

東欧や南欧からの移民が低賃金労働に甘んじなければ生きられなかった20世紀初頭の1906年(明治39年)、アプトン・シンクレア(Upton Sinclair, 1878-1968)はシカゴに住む移民の悲惨な状況と彼らの多くが働く食肉業界の裏側を暴き出した長編小説『ジャングル』(*The Jungle*, 1906)で、一躍社会主義作家としての立場を確立すると同時に、世界にその名が知られるようになった。

日本でも1925年(大正14年)に前田河廣一郎が『ジャングル』として訳出している。翻訳国家日本にもかかわらず、原書が世に送り出されて19年も経ってから訳出されたのはなぜかについては稿を改めたい。続いて1929年(昭和4年)、30年(昭和5年)に、前田河は長野兼一郎とともに本稿で取り上げる長編小説『ボストン』(*Boston*, 1928)を訳出した。こちらは原書が出版されてわずか1年後の訳出である。手元にある原書は全755ページに及ぶ大作である。それを2人は1年をかけずして上下2巻で訳出し、出版した。その

理由は、この小説の主題が人の命を国家権力が奪うという事件、しかも冤罪裁判の色濃い裁判とその結果を扱ったものだったからであろう。また後述するが、この時代には日本においても第一次世界大戦（1914-18）後の余波が強く、また1917年（大正6年）のロシア革命によって世界に初めて社会主義国家ソヴィエトが生まれ、経済的に恵まれない階層の、特に若い世代が社会主義や共産主義へ憧れを持ち、惹かれていくことへの不安感が生まれていた。

シンクレアが『ボストン』を書くきっかけとなったのは、「サッコ＝ヴァンゼッティ事件」（Sacco-Vanzetti case）であった。日本ではまさに日本版『ジャングル』と呼ぶべき『蟹工船』をプロレタリア作家の小林多喜二が1929年（昭和4年）に発表し、共産党の「非合法」活動のため捕らえられ、その結果サッコとヴァンゼッティとは違った経緯だが、拷問による死を遂げている。

アメリカにおいても、この時代、ソヴィエトが生まれることによって資本主義と社会主義との比較が社会の底辺に渦巻いた。多くの労働者は社会主義に夢をかけるころがあった。『ジャングル』の主人公ユルギス（Jurgis）が社会主義に期待する姿を見れば、この見方が決して行き過ぎたものではないことがわかる¹。

しかし建国以来、資本主義一辺倒で国力をつけ、第一次世界大戦でようやく世界に認められ始めたアメリカがユルギスのような生き方を認めるはずもなく、また資本主義を崩すような思想が世にはびこることなどもっての外であった。

世紀末を無事に過ごし、第一次世界大戦を乗り越えて新しい時代、そして新しい世紀を形成しようとする1920年代とはどのような時代であったのか、またその時代、進取の気性に富んだ女性はどのように生きたのか、シンクレアの『ボストン』に登場する2人の女性コーネリア・ソーンウェル（Cornelia Thornwell）とその孫ベティ（Betty）を通して考察する。

コーネリアとベティが関わる事件

この小説の時代は、本学の前身である日本女子高等学院が人見東明・緑夫妻を両親に産声を上げた1920年（大正9年）に始まる時代である。建国以来平等を唱えてきたあのアメリカであってすら、成人女性に参政権があたえられたのはこの年のことであった。それまでアメリカの女性は何もしてこなかったのか、そしてアメリカは女性に対して何もしてこなかったのだろうか。

女性の社会への進出やそれを支える参政権については、それぞれの国の価値観や道徳観によるところが大きい。アメリカは英国をはじめヨーロッパからの移民によって形成されてきた国家である。英国から独立し、新しい国家として始まったが、英国の、また他のヨーロッパ諸国の価値観や道徳観がいつまでも尾を引いていた。特に英国のそれが根強く残った。これを払拭するには新しい時代を見なければならなかったのである。

自立できる女性の育成を目標に日本女子高等学院を設立した、詩人人見東明は開講の詞を「夜が明けようとしてゐる。五年と云ふながい間、世界の空は陰惨な雲に掩はれて、人々

は暗い檻の中に押し込められて、身動きも出来なかった。けれど、今や、一道の光明が空の彼方から仄めき出して、新しい文化の夜が明けようとしてゐる。人々は檻の中から這ひ出し、閉ぢ込められた心を押し開いて、文化の素晴らしい光を迎へようとしてゐる。」と始めている。

「陰惨な雲」とは、ここではもちろん第一次世界大戦のことである。しかしアメリカの進取の気性に富んだ女性、たとえば奴隷制廃止運動や婦人参政権獲得運動を積極的に推し進めたスーザン・B・アンソニー (Susan Brownell Anthony, 1820-1906) や1872年 (明治5年) に女性初の大統領候補となった社会改革家ヴィクトリア・ウッドハル (Victoria Woodhull, 1838-1927) のような女性は、ヴィクトリア朝時代の価値観や道徳観をその「雲」に見立て、新しい世紀を迎える前から新しい価値観や道徳観を追い求めたのだ。

1920年代のアメリカはまさに「夜が明けようとしてゐる」時代であった。ヴィクトリア朝時代の古い価値観を捨てて、新しい価値観を追い求める人も少なくなかった。『ボストン』の主人公コーネリア・ソーンウェルは穏やかな性格の持ち主だが、そうした一面を秘める60歳の女性だ。

物語は、マサチューセッツ州知事を務めたコーネリアの夫ジョサイア (Josiah) が亡くなる前夜から始まる。夫が亡くなった後、どこの家族にもよく見られるように、ソーンウェル家の遺産をめぐる一族の醜い争いが始まる。その様子を目の当たりにしたコーネリアは、夫の葬儀が終わると誰にも気づかれないようこっそりと家を出て、ノースプリマス (North Plymouth) の町へとやって来る。

頼るべき人のいないコーネリアは、貧しいイタリア人移民のヴィンセンツォ (Vincenzo) とアルフォンシナ (Alfonsina) の夫婦の家庭に下宿することになる。プリニ夫婦には3人の子どものほかに、もう1人男性の下宿人で、イタリア人移民のバルトロメオ・ヴァンゼッティ (Bartolomeo Vanzetti, 1888-1927) がいた。浴室も全員で使わなければならない。コーネリアにとっては初めての経験である。金銭的に何ひとつ不自由のない上流社会の生活から一転して、移民してきたばかりの貧しい1人の老女も同然の身になったのだ。日々の糧を自分で稼がなければならない新しい人生を彼女は歩みだしたのである。

毎日の生活のために高齢の体に鞭打って働かなければならず、身体的に重度の疲労感を覚えながらも、イタリア人家族との暮らしによって精神的な満足感を得るコーネリア。彼女にとって州知事の妻として生きてきた40年間は自分の意志が決して尊重されることのない苦痛の毎日だったのだ。その気持ちは、1人家を出るときに子どもたちに残す置き手紙の冒頭に表されている。

“My dear Children:

“For forty years I have been doing what other people wanted me to do, and I have never had any fun...” (33)

新しい生活の中でさまざまな体験をするコーネリアだが、中でもブリニ家に下宿するヴァンゼッティとの出会いは、その後の彼女の運命を決定づけるものになる。ヴァンゼッティは自然を愛し、まるで子どものように喜怒哀楽を表す気持ちの良い人間だが、非アメリカ的 (un-American) なアナーキズムの信奉者であった。彼の思想を次第に理解していくコーネリアはストライキに参加し、労働者を搾取する資本家に対して憤りを感じるようになる。それは自分の一族ソーンウェル家に対する怒りでもあった。以下は彼女が、娘の夫である弁護士へのンリ (Henry) に語る場面である。

We are living off the labor of these wops whom we despise, and hold in order with clubs and bayonets. Think of it, Henry—that man whose head I saw split open was getting nine dollars a week to keep a family on, and his crime was that he was asking twelve. We women were getting six dollars a week, and our crime was that we were asking eight—and Vanzetti's crime was helping us! There was the greatest and richest cordage concern in the country—their net profits that year were nearly three million dollars! Think of the families we know who are living off those profits, doing nothing else, unless they choose! (461)²

シンクレアの胸中には、農民を思い、市井の人びとを心にかけて古代ローマの護民官グラックス (Gracchus) 兄弟の母親コーネリアの名前があったかもしれない。

そして1920年 (大正9年) 4月15日、運命の事件が起こる。シンクレアはこの事件について“...came another sensation, known to history as ‘the South Braintree crime.’” (222) と記している。この「サウス・ブレイントリー犯罪」とは、ボストン市内のサウス・ブレイントリー地区にあった製靴工場スレーター・アンド・モリル社 (Slater & Morill Shoe Factory) の会計が給料を護衛と一緒に運ぶところを「外国人らしい2人の男 (two foreign-looking men)」(222) に銃撃されて16,000ドルあまりを奪われた上、1人は即死、もう1人も翌日死亡するという事件であった。

この事件の容疑者としてアナーキストのイタリア人2名が逮捕される。その1人が、コーネリアが下宿先で知り合ったヴァンゼッティ、もう1人がその友人ニコラ・サッコ (Nicola Sacco, 1891-1927) であった。

この事件が起こる3年前の1917年、レーニン率いるロシア社会民主労働党の一勢力であるボルシェヴィキ (Bolshevik) が革命を起こし、世界初の社会主義国家、ソヴィエトが誕生していた。それを契機にアメリカは第一次世界大戦に参戦した。移民国家ゆえに参戦を選ばなければならなかったのだ。産まれたばかりの非アメリカ的思想を、新たに押し寄せてくる移民の波が運んでこないともかぎらなかつた。これを防ぐには、資本主義国家アメリカの良さを国民に見せつけなければならない。それが為政者の役割であった。

結局アメリカは世界の民主主義を声高に叫びながら、第一次世界大戦に参戦し、そして勝利した。この勝利を礎に資本主義体制はますます強固なものとなり、保守化が進んだ。

いや、政府が積極的に保守化を推し進めたと言ったほうが正しい。ウィルソン政権の司法長官ミッチェル・パーマー (Mitchell Palmer, 1872-1936) が戦後の1919年 (大正8年) から翌年にかけて「共産主義者狩り」(Palmer Raids) を展開し、21年 (大正10年) には移民制限法 (Immigration Act of 1921) を成立させているからだ。

「共産主義者狩り」は共産主義への恐怖感を国民に浸透させることになった。資本主義国家アメリカに生まれ育ち、また資本主義の利点を享受してきた国民は「共産主義者」と指差されることすら恐れた。保守化し、アメリカ的な伝統を改めて良いものとする国民は、非アメリカ的な共産主義やアナキズムを徹底して嫌うようになった。そうでなくともこの時期に東欧や南欧からやって来た移民は、言語も習俗もそれまでの移民とは全く異質で、彼らが持ち込んでくる非アメリカ的なもの、あるいはアメリカの伝統にそぐわないものは攻撃対象となっていたのである。

そうした風潮のなかで起きたサッコとヴァンゼッティの事件では、こうした事実が彼らにとって逆風になったことは間違いない。不運にもアナキストであったことは、容疑者となって逮捕された2人に最悪の条件を突きつけることになった。さらに2人は銃を所持していた。こうした状況下で行われた裁判で無罪を勝ち取ることは不可能であった。2人の死刑が宣告されると、彼らの思想ゆえの不当な裁判であり、冤罪裁判だと猛烈な抗議運動が世界中で行われた³。

ニューウーマン 新しい女性

シンクレアがこの事件をテーマに小説を書いたのは、世界的抗議運動が起こったことに同調し、裁判そのものに抗議するつもりからはなかった。中田幸子は『アプトン・シンクレア—旗印は社会正義』(1996) において、『ボストン』を書き始めたのは「資本主義アメリカの縮図の姿を呈しているボストン社会の腐敗、無責任を明らかにするため」(107) という見解を述べているが、この見解の正しさは、シンクレア自身が序文に「複雑な共同体をありのままに誠実に描こうと努力した」(“An honest effort has here been made to portray a complex community exactly as it is.”) と述べていることから明らかである。

本稿ではそうした複雑な社会に起こった冤罪裁判の主人公とも言うべき、サッコとヴァンゼッティに焦点を置くつもりはない。むしろ、そうした事件に巻き込まれた人間と、本来であれば接点を全く持ち合わせなかったであろう上流階級の女性コーネリアとその孫で名門ラドクリフ女子大学 (Radcliffe College) の学生になるベティの資質に注目して、1920年代を象徴するとも言えるこの冤罪裁判を扱いながら、シンクレアはなぜ女性にその物語を語らせたのかについて考えてみたい。

『ボストン』が発表された1920年代は一般的に「狂騒の20年代」(the Roaring Twenties) と呼ばれるが、筆者は「新しい女性の時代」(Age of New Woman) と呼びたい。確かに第一次世界大戦後から1929年 (昭和4年) 10月24日、俗にいう「暗黒の木曜日」に端を発

する世界恐慌までは、第一次世界大戦勝利の余波に誰もが浮かれ騒いだ、まさに「狂騒」の時代であった。しかし、一方では「新しい女性」が輩出され始めた時代でもあったのだ。

その代表的存在がガートルード・エイダリ (Gertrude Ederle, 1906-2003) だった。エイダリは1924年 (大正13年) のパリ・オリンピックで金メダルを獲得し、水泳のチャンピオンとしての立場を確立していた。だが「新しい女性」としての立場を確立したのは、サッコとヴァンゼッティが冤罪のまま処刑される前年の1926年 (大正15年) 8月6日午後9時39分、イギリス海峡を泳いで渡り、海からあがってきた時であった。それまでこの海峡を泳ぎきったのは男性5人だけであったが、彼らが打ち立てた記録に勝る14時間31分という大記録を樹立させた瞬間であったのだ。

エイダリの偉業はフェミニズムにとっての1つの勝利であった⁴。身体的に男性に勝利したという事実は、それまでの女性に対する男性の身勝手な考え方を打ち倒し、新たな威厳を女性に与える契機になった。しかしエイダリを身体的に評価するだけでは、筆者はもの足りない。海峡を泳いで渡ろうという決意は、新しい時代への、翻ってみれば古い時代の価値観への挑戦だったと言えるからだ。

筆者が前述の通りエイダリを「新しい女性」の代表的存在と言ったのは、彼女以前に、先に名前を出したウッドハルなどの後を受け、地道な活動をしてきた一群の女性がいたからである。

1920年代の女性を考えると誰もがまず思いつのが、この時代を代表する作家のフランシス・スコット・フィッツジェラルド (Francis Scott Fitzgerald, 1896-1940) が当時の若い世代に爆発的な人気を呼んだ処女長編小説『楽園のこちら側』 (*This Side of Paradise*, 1920) でその生態を明らかにした、いわゆるフラッパー (flapper) と呼ばれる若い世代の女性たちであろう。フィッツジェラルドの妻ゼルダ (Zelda) 自身もフラッパーであった。

フラッパーの生き方は、1950年代から始まる既成の社会や価値観に対抗するカウンターカルチャー (counterculture) のはしりであり、第一次世界大戦までその余波があったヴィクトリア女王時代 (1837-1901) に確立された「お上品な」^{リスベクタブル} 伝統に対抗する価値観の現れであった。派手な化粧、膝頭に見える短い丈のスカート、袖のない腕が露わになった洋服、ボブヘア (bobbed hair)、喫煙、飲酒—これがフラッパーの風俗であった。

歴史家で伝記作家のトム・ストライズグス (Tom Streissguth) はその著『狂騒の20年代』 (*The Roaring Twenties*, 2001) でフラッパーについて次のように述べている。

Properly brought-up women defied their mothers by daring to wear makeup (especially lipstick), smoke cigarettes, display jewelry, rather prominently, and dance closely. Critics saw the accoutrements of prostitutes afflicting respectable society; flappers looked on the elder generation as old-fashioned puritans that now offered the country only hypocrisy and outmoded sentiments. (39)

フラッパーはヴィクトリア女王時代の価値観に対抗する意志を、まず化粧や服装、つまり外面的なもので表現した。フラッパーの親世代には到底考えられないような身なりをすることで、旧価値観との間に溝を作り、自らのアイデンティティを確立させようとしたのである。

コーネリアの孫であるベティの「女性がいつでも短いスカートを履いていたらどんなにか良いだろう。」(“I wish that women might wear short skirts all the time.” 108) という発言からは、フラッパー流の短いスカートを切望する当時の若い女性の気持ちが伺える。これは、もう一度繰り返すが、旧い価値観全体に対抗する若い世代の気持ちが、単なる風俗面での現象の下に潜んでいたということであった。しかし、厳密に言えば、これはごく一部に限られたことであり、若い女性であれば誰もがフラッパー、表現を変えるならば、旧価値観から解放されることを強く望んだ「新しい女性」として青春を謳歌していたわけではない。

この時代、女性にも参政権が与えられはしたものの、世相的には保守化が進み、相変わらず旧態依然とした価値観がはびこっていた。後述するが、コーネリアの娘でベティの母親であるデボラ (Deborah) や、その妹のクララ (Clara) などはその典型として描かれている。特にクララについては、婦人参政権の意味がわからない女性として描かれている。

しかしフラッパーに代表される「新しい女性」については数が重要なのではなく、なぜこうした女性たちがこの時代に現れ始めたのかということが問題である。その答えを考える鍵となるのが第一次世界大戦であろう。

この大戦は多くの国民に「失望感」を抱かせた。アメリカは世界の民主主義のためという大義名分を掲げ、全国民を参戦へと向かわせた。誰もが愛国的に、そしてこのプロパガンダを信じて戦場へと赴いていった。だが、果たして民主主義が支配する世界が生まれたのだろうか。この疑問は、上述のフィッツジェラルドを始めとする「失われた世代」(Lost Generation) と呼ばれる文学者たちを引き合いに語られることが多いが、そうした作家群に限らず多くの国民が失望の念に駆られたのだった。

政府はアメリカ特有の孤立主義へ向かい、既に述べたミッチェル・パーマーの「共産主義者狩り」を進め、国内にレッドスケア (red scare) を蔓延させることで保守化を進めた。戦勝国として、アメリカ経済は繁栄し、これまでにない消費文化時代を形成した。この保守化と消費文化との狭間に「新しい女性」が参加できるテーマがさまざまに散らばっていたのだ。

ニューウーマン 「新しい女性」に象徴されること

ローレンス・キャプラン (Laurence Kaplan) はヴィクトリア朝的価値観における女性と家庭の役割について次のように要約している。

Thought to be basic to every other institution was the family unit, whose stability supposedly determined the very health of society. And essential to family life remained the submissive

role of women. As the weaker and more sensitive sex, females were trained from childhood to be full time wives and devoted mothers. Their assigned role consisted of obeying their husband and master by managing his household and by raising his children. (60)

キャプランが述べるように、ヴィクトリア朝時代の女性は家庭の中で非常に大きな役割を担っていた。家庭の道徳の守護者、夫に従順である妻、優しい母。これが女性の理想像であった。

家庭でのエキスパート、つまり良妻賢母を育てるために、女性の高等教育機関も設けられるようになった。ベティが通ったラドクリフ女子大学に代表される高等教育機関は19世紀中葉から19世紀末にかけて設立された。

女性のための高等教育機関とはいえ、設立当初は家庭という領域の中で女性としての、そして母親としての役割を十分に発揮できるための家政学を中心とする教育が行われたところが多かったが、時代の要請に応えるかたちで幅広い学問が可能なリベラルアーツ系大学として発展した。ジョシュア・ツァイツ (Joshua Zeitz) は大学に進んだ女性について注目すべき個人名を挙げつつ、彼女たちが2つの選択肢を持っていたことを指摘している。

Many of these educated women surely rejected matrimony because they weren't interested in sacrificing their careers. But others might have been reluctant to forfeit the deep-felt bonds they forged with other women. In these years, it was common for educated middle-class women, particularly professionals and social activists, to forge so-called Boston marriage — long-term domestic partnerships that were acknowledged openly but lacked any real legal standing. Such was the case for the settlement house founder Jane Addams (1860-1935) and her life partner, Mary Rozet Smith (1868-1933); Mary Woolley (1863-1947), president of Mount Holyoke College, and her former student Jeanette Marks (1875-1964); and Vida Scudder (1861-1954) and Florence Converse (1871-1967), both professors at Wellesley College. (119, date of birth and death mine)

「^{ニュー・ウーマン}新しい女性」にとっては、ヴィクトリア朝的時代感覚は既に過去の遺物になりかけている時代に入っていたのだ。しかしその一方ではベティの母親デボラのように、参政権を獲得した後も、女性の意見は夫に反映されているものであるから政治に参加する必要はないと考え、家庭に入り、家事を切り盛りすることが女性には望ましいと思っていた女性もいたのである。

ベティは、葬儀では女性なら誰もが被るべき黒のベールを祖母コーネリアが被らずにいたことを嬉しく思うというような因習に囚われない人物で、コーネリアと同じく既成の社会や価値観に疑問を感じていた。そのためコーネリアが戦争反対のデモに参加するとベティも同行する。その後もベティはコーネリアと共に行動することを切望するが、娘がデモに

参加したことを知った両親は、コーネリアを訪ねることを禁止する。これに激しく抗議するベティの姿勢を、シンクレアは次のように描いている。

“But, Mother, do you seriously think I should spend my life sitting around waiting for you and father to die?”

“Oh, what things you do say!”

“But that’s what *you* said! I’m not to do any thinking of my own until you are dead and I’ve got the money. But what good would it be to me then? I wouldn’t know any better to do with it than to make yellow flannel petticoats for the poor — so ugly that the poor can’t be persuaded to wear them!” (140)

これはたとえ娘であっても、ベティが生まれ育った家庭の母親に向かって決して言うてはならないことであった。

That was a dreadful utterance — a jeer at *the most sacred institution of feminine Boston*, the “Sewing Circle”: *a group of ladies of the highest social rank*, who met for luncheon at one another’s homes, and afterwards sewed for the poor and gossiped for the rich. (140, italics mine)

デボラが参加していた「裁縫会」(Sewing Circle)は、ボストンの上流階級の女性にとっては最も神聖な慈善活動の場であるが、ベティはそれを否定するような発言をしてしまう。それは若気の至りからだっただろう。デボラはベティにラドクリフ女子大学へ入学し、卒業後は結婚して家庭に入るという、ごく普通の生き方を期待していた。ベティの歩もうとしている道ではデボラの人生すべてを踏みにじるも同然となってしまうのだ。結局、ベティはラドクリフ女子大学へ入学することを条件に、祖母と祖母の知り合いであるアナーキストや社会主義者らに会うことを許された。

コーネリアは結婚して以来40年間、夫ジョサイアが他界するまで家族のためにその人生を費やしてきた。しかしそれは喜びや満足感など決して得られない、自分の意志を貫き通すことのできない人生であったのだ。

[S]he had never felt at ease in the house; she had never been able to have her way, it always had to be the Thornwell way. A public career had not been enough for Josiah; he had insisted upon managing his household.... Great-aunt Deborah had lived in the home until her death, quite recently, and had been the real mistress of the family, with the duty of teaching the daughters what Thornwell daughters ought to know and think. For Cornelia there had been a little music and a little painting, a rose garden and some books, a few friends, a play now and

then and symphony concerts. Gradually the family got used to the fact that they could expect no more of her than this— that she should conceal from them the fact that she found any element of fun in their sober traditions. (14)

自分の意志とは関係なく、ソーンウェル家のやり方を踏襲せねばならないもどかしさや、苦しみに満ちたこれまでの人生に見切りを付け、コーネリアは家を飛び出すことになる。既に引いたコーネリアの置き手紙をあらためてここに引くのは、その冒頭の文言に大きな意味があるからである。

For forty years I have been doing what other people wanted me to do, and I have never had any fun.... I am not taking any property, because there has been too much of it in my life, and I believe I shall be happier without it. I am going to prove to myself, for my own satisfaction, that I can take care of myself, without any advice or assistance from any one. (33)

妻として母親として過ごしてきた40年間を無にしてしまうような文言である。「財産などない方が幸せだ」という一言には「誰の助言も誰の助けも求めずに」という文言が補うように、今から「独り立ちする」と心に誓う、その意志の強さが感じられてならない。イブセン (Henrik Ibsen, 1828-1906) の名作『人形の家』(*Et Dukkehjem*, 1879; 英訳1889) の主人公ノラ (Nora) を想起させるものである。

コーネリアが家を出て、貧しいイタリア系移民のブリニ一家のもとに下宿している間も、既に引いたジェイン・アダムズやジュリア・レイスロップ (Julia Clifford Lathrop, 1858-1932)、フローレンス・ケリー (Florence Kelley, 1859-1932) らが社会福祉事業家として活躍している。コーネリアはただ単に、自らの人生を好きなようにやり直してみようというよりも、むしろそうした社会改革派の女性たちに遅ればせながらついていこうとしていたのである。

ベティがラドクリフ女子大学の学生になった頃、コーネリアの本棚には100冊にもおよぶ「赤い表紙の危険な本」(subversive books with red bindings, 147) が揃っていた。コーネリアは自分に可能な何らかの形で社会参加しようとしていたに違いない。その背後にはブリニ家に下宿するヴァンゼッティの影響があるのだが、そもそもコーネリアが家を飛び出すことになった理由の1つから、彼女が現実社会に入っていこうとする様子が窺える。

Not so many years ago, though it now seemed ages to Cornelia Thornwell, there had been a strike in the Thornwell Mills, and it had been broken in the usual way. But Cornelia's husband had sent her away to the country-place of their daughter Deborah on the North Shore; so she had not heard the shouts of the mob and the crack of revolvers.... One cause of her evolving into a runaway grandmother had been a lurking suspicion that their way of breaking a strike had not been entirely ethical. (70)

ベティはラドクリフ女子大学の勉強は「いい加減」(“a lick and a promise”, 147)にして、世界帝国主義についてのバートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) の書いたものを読むようになっていた。つまり、祖母のところへ出入りすることが現実社会に直接参加するも同然のことであったのだろう。またベティには、母親のデボラ以外にも反面教師の役割をする女性が身近にいた。叔母のクララだった。デボラの妹で8人もの子どもを抱え、母親としての役目をしっかりと果たすタイプの女性であった。

The true “anti” was Cornelia’s youngest daughter, Clara Thornwell Scatterbridge, who stayed at home with her eight babies, and loved them and petted them and scolded them and wept over them.... Clara had no idea what a vote looked like. (168)

“anti”とは、ここでは婦人参政権獲得運動反対派を指し、ベティの母親デボラも「熱心な反対派」(vigorous “anti”, 167)であった。

この時代、婦人参政権獲得運動は2つに分裂していた。この点について、シンクレアは次のように書いている。

The suffragists were divided into two groups, the respectable ones, who made dignified speeches and circulated petitions and got an inch in the newspapers once a month; and the militants, who set themselves the goal of a front-page story twice a day, and made it most of the time. Each of these two groups was active in Boston — a city full of ladies who felt themselves competent to take charge, not only of America, but of the world. (167)

コーネリアもベティも「お上品な」グループと「戦闘的な」グループそれぞれに誘いを受けたが、2人とも後者を応援した。ベティはフェミニズムの先駆者とも言われる英国の作家メアリ・ウルストンクラフト・ゴドウィン (Mary Wollstonecraft Godwin, 1759-97) の『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792) に強い影響を受けて、女性参政権論者になったのだが、ベティが戦闘的なグループに傾くことは、母親、叔母の両方が反面教師としての役割を果たしてくれたことから理解できる。

結婚について彼女は、コーネリアに宛てた手紙の中で、ロジャー (Roger) という結婚を申し込んでくる男性に告げた自らの結婚観について次のように語っている。

I told him I had come to realize that *marriage was a form of slavery for women*; and he said he knew what I meant, it was the word obey in the ceremony, but there were some clergymen who would leave that out if you asked them to. And I said it wasn’t only that, *it was the idea of a woman’s parting with her autonomy; that every woman ought to have the final say about the children she bore....* (109, italics mine)

ベティがこのようなことを祖母に語っている時代にコムストック法 (Comstock Law, 1873)、すなわち「不道徳文書取締法」によって1年間アメリカを追放された女性がいた。産児制限運動を展開していたマーガレット・サンガー (Margaret Sanger, 1883-1966) である。エイダリと並ぶ「新しい女性」の1人であり、産児制限についてのパンフレットを郵送したために国外追放となったのだった。サンガーはその著書『女性と新しい種族』(*Woman and the New Race*, 1920) に次のように記している。

The basic freedom of the world is woman's freedom. A free race cannot be born of slave mothers. A woman enchained cannot choose but give a measure of that bondage to her sons and daughters. No woman can call herself free who does not own and control her body. No woman can call herself free until she can choose consciously whether she will or will not be a mother. (94)

「女性が産むか産まぬかを意識的に決められるまでは自由とは言えない」とは、それこそ1970年代のフェミニズムの中心的なテーマの1つである。それが1910年代から語られていたのだ。ベティの「女性が子どもについての決定権を持つべきだ」という言い分も全く同じことである。

そこにはまさしく『人形の家』のノラが求めたと同じ「自律性」を求める姿勢がある。

ベティは「結婚は自律性を捨てることだ」とも言い切っている。それは祖母のコーネリアが「誰の助言も援助もなしにやっけていかれる」と置き手紙に記し、わずかな現金だけを持って家を出るときの姿勢と重なるところでもある。

コーネリアは結婚し、夫が亡くなるまでの人生の中で自分の意志が尊重されない場面に幾度も遭遇してきた。妻として家庭を切り盛りする時にも、母として子どもを育てる時にも、自らの意志を通すことが出来ないうでいた。それだけでなく、真実を見ようとする姿勢と機会も奪われてきた。その象徴とも言えるのが、既に引いた引用にあるように、ソーンウェル家所有の工場でストライキが起きた時であった。ストライキの様子がコーネリアの目に入らないよう、夫はコーネリアを娘の家へと送り出した。自分たちの生活がストライキを起している労働者によって成り立っているという事実を認めようとしないうこうした姿勢にコーネリアは疑問を抱いていたのである。

ブリニ家やヴァンゼッティら移民労働者との関わりによって、これまで見えていなかった真実を実際に目のあたりにし、コーネリアは自分の一族が属する上流階級の偽善性に気づいてしまった。そして、そうした社会から抜け出そうとした。新たな世界、つまり新たな価値観へと足を踏み入れようとしたのである。

コーネリアは60歳にして初めて全てを自分の意志によって決定する「自律性」のある人生を求め始めたのである。しかもそれを自らの残された人生への課題とした女性なのだ。

むすびに

本稿では『ポストン』を、コーネリアが家を捨て、貧しいイタリア移民の家に下宿し、そこでアナーキストやその友人の移民労働者に会うことによって真実を見つめ、自分の意志をしっかり持って生きることを意味を知ったこと、また孫ベティがコーネリアを通して「自律性」を持った生き方をする「新しい女性」を目指すことになったという点に重きを置いて論じてきた。

シンクレアは、サッコとヴァンゼッティの冤罪裁判という史実と、真実を求めながら新しい価値観に触れようとしている上流階級出身の女性コーネリア、そしてその孫ベティとを関係させることによって、この時代を生きる「新しい女性」のありのままの姿を鮮明に描こうとしたのである。「新しい女性」とはコーネリアやベティのように「自律性」を重んじて生きる女性と言ってよいだろう。また、社会福祉事業家のジェイン・アダムズや労働省児童局の初代局長になったレイスロップのように表立って活躍する女性に限らず、平凡な市民生活を送りながらも自らの行動を主体的に規制でき、因習に囚われずに自らが立てた規範に従って行動できるタイプの女性が「新しい女性」だと言える。

今の時代、女性が高等教育を受けることが当然のことになっているが、自分自身の生活規範を自らの手によって立てる力をつけられているだろうか。筆を置くにあたって、自らの足もとを見つめながら考えている。

注

- 1 昭和女子大学大学院英米文学研究会編『Evergreen』第28号、拙論『『ジャングル』をめぐって』を参照されたい。
- 2 シンクレアと同時期の英国の作家 E・M・フォスター (E. M. Forster, 1879-1970) は BBC に 1946年 (昭和21年) に依頼されて放送した「現代の課題」(‘The Challenge of our Time’) の中で自らを「ヴィクトリア朝リベラル派の残滓」(the fag-end of Victorian liberalism, 54) とあかししながら、この時代とこの時代を楽しむ中産階級について次のように冴えた眼で批判している。

But though the education was humane it was imperfect, inasmuch as we none of us realized our economic position. In came the nice fat dividends, up rose the lofty thoughts, and we did not realize that all the time we were exploiting the poor of our own country and the backward races abroad, and getting bigger profits from our investments than we should. We refused to face this unpalatable truth. I remember being told as a small boy, “Dear, don’t talk about money, it’s ugly” — a good example, that, of Victorian defence mechanism. (55)

- 3 サッコとヴァンゼッティに死刑の判決が下されたことに対して多くの著名人が反応を示したが、中でもドス・パソス (John Dos Passos, 1896-1970) は、サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-80) が最高傑作とまで言っている (Bercovitch, 207) 『USA』(U.S.A., 1930-36) の中で、次のように述べている。

they have clubbed us off the streets they are stronger they are rich they hire and fire the politicians the newspapereditors the old judges the small men with reputations the collegepresidents the wardheelers (listen businessmen collegepresidents judges America will not forget her betrayers) they

hire the men with guns the uniforms the policecars the patrolwagons.... all right we are two nations
(1156-7)

- 4 エイダリについて、歴史学者スーザン・ウェア (Susan Ware) は次のように書いている。

Her channel swim had definite feminist implications. Not only was Ederle the first woman to complete the swim, she did it faster than any of the previous men. In other words, this young American girl had proved herself to be men's better in the water, thereby undermining, if not demolishing, rationales about women's being the weaker sex. (179, italics mine)

参考文献

- Allen, Frederick Lewis. *Only Yesterday: An Informal History of the 1920s*. New York: John Wiley & Sons Inc., 1997.
- Bercovitch, Sacvan. *The Cambridge History of American Literature: Vol. 6*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- Dos Passos, John. *U. S. A.* New York: Literary Classics of the United States, Inc., 1996.
- Forster, Edward Morgan. 'The Challenge of our Time' (1946), in *Two Cheers for Democracy*. London: Edward Arnold. (1972, Abinger Edition. First published in 1951).
- Kaplan, Laurence. *A Utopia during the Progressive era: the Helicon Home Colony*. *American Studies*, 25, No. 2, 1984.
- Norton, Mary Beth (et al). *A People and a Nation: A History of the United States. (6th edition)*. Boston: Houghton Mifflin Company, 2001.
- Sanger, Margaret. *Woman and the New Race*. New York: Brentano's Publishers, 1920.
- Sinclair, Upton. *The Autobiography of Upton Sinclair*. New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1962.
_____. *Boston: A Documentary Novel of the Sacco-Vanzetti Case*. Cambridge, Massachusetts: Robert Bentley Publishers, 1978.
- Streissguth, Tom. *The Roaring Twenties: An Eyewitness History*. New York: Facts on File, Inc., 2001.
- Sullivan, Mark. *Our Times: The United States 1900-1925 VI The Twenties*. New York: Charles Scribner's Sons, 1937.
- Ware, Susan. 'An Epic Feat: Gertrude Ederle Swims the Channel' in Wukovits, John F. *The 1920s*. San Diego: Greenhaven Press, 2000.
- Zeit, Joshua. *Flapper: A Madcap Story of Sex, Style, Celebrity, and the Women Who Made American Modern*. New York: Crown Publishers, 2006.
- Zinn, Howard. *A People's History of the United States: 1492-Present (Perennial Classics)*. New York: Perennial, 2003.
- 亀井俊介・鈴木健次監修、有賀夏紀・能登路雅子編『史料で読むアメリカ文化史—1920年代—1950年代④』東京、東京大学出版会、2005年。
- 中島祥子『『ジャングル』をめぐる』昭和女子大学大学院英米文学研究会編『Evergreen』第28号、2008年。
- 中田幸子『アプトン・シンクレア — 旗印は社会正義』東京、国書刊行会、1996年。

(なかじま しょうこ 亜細亜大学短期大学部講師)